

カンボジアの子供支援



木村瞳さん

「ハンカチの木」

木村瞳代表

白い花をつける「ハンカチの木」は平和の象徴だという。それを名前にし、カンボジアの子どもたちの初等教育を支援するグループが平成十二年からスタートしている。花野井の曹洞宗・大洞院の奥さん木村瞳さんが代表で、柏には「カンボジアに学校を贈る会」、タイの子どもたちに学用品を贈るネットワーク「ハーマニー」も活躍中で、いずれも女性代表がボランティア活動の中心になっている。

無住の寺を再建，地域に根ざす

「ハンカチの木」では、日本の絵本に、クメール語のシールを貼って、カンボジアの子どもたちが絵本を読み、楽しめるようにしている。すでに二千冊が送られ、そのシール貼りがボランティアの手作業で行われている。現地教員研修への援助も活動の中心になっている。いわば、学校を送る会がハードなら、こちらはソフトでの貢献となる。現地を視察してきた瞳代表は、カンボジアの人たちからエネルギーをもらい、さまざまなことを勉強させてもらった、という。

大洞院再建への苦勞

この「ハンカチの木」を立ち上げるまで、大洞院の住職としての木村誠治・瞳夫妻の努力には大きな苦勞が秘められている。夫妻が入山した、昭和五十九年は無住の寺で、本堂はトタンで出来た物置小屋のようだった。「映画に出てくる山賊が住んでいるお寺みたいだ」ともいわれた。その本堂の掃除中に底が抜け、瞳さんは両側の板にはさみこまれたという。

底抜け事件で危機感を持った檀家が相談し、改修が軌道にのまり、地域の希望で、坐禅会も始まる。檀家に開かれた寺として法話、コンサート、さらにペット霊園も始まった。住職夫妻の人柄が、大きな力になっているようだ。畑になっていたところを墓地にして七十二軒の檀家は、四百五十軒になった。

大洞院再建に続いて「ハンカチの木」活動がスタートした。



写真は花井山・大洞院の正面。本堂は平成2年に完成。本堂前には幹周り532センチというイチョウの巨木がそびえ立つ

末広クラブ・逆井漫步55 平成15年2月